

博士学位論文審査結果の概要

ふりがな 氏 名 学位の種類 学位記番号 学位授与年月日 学位論文題目	いわき    なおこ 岩城    直子 博士（看護学） 博第 9 号 平成 27 年 3 月 13 日 外来で放射線療法を受けるがん患者の精神心理的援助 —PIL テストを手がかりとした対話による看護介入の効果—
審査委員	主査 石川県立看護大学 教授 高山 成子 副査 石川県立看護大学 教授 牧野 智恵 副査 石川県立看護大学 教授 浅見 洋 副査 石川県立看護大学 教授 今井 美和
<p>平成 27 年 1 月 15 日に本審査及び最終試験を行った。本研究の概要と結果は以下のとおりである。</p> <p>本研究は、外来で放射線療法を受けるがん患者 19 名に看護介入を実施し、心理的適応尺度、QOL 尺度の対照群 21 名との比較、面談の内容で検証している。看護介入は、放射線療法開始 1 週目に、生きることの意味への考えを可視化する「PIL テスト」を実施し、2 週目にその結果を図に表して「PIL テストを手がかりにした対話」をすることである。また、「PIL テストを手がかりにした対話」の各対象者の情報を放射線治療部門医療関係者にカンファレンスで報告し、その効果を医療関係者へのグループインタビューで明らかにしている。そのため、本論文はⅠ章.文献検討、Ⅱ章.研究の目的と概念枠組み、Ⅲ章.「PIL テストを手がかりとした対話」による看護介入の効果、Ⅳ章.放射線治療部門医療関係者との情報共有の効果、Ⅴ章.終章で構成されている。</p> <p>結果として、「PIL テストを手がかりとした対話」の介入は、介入群の対話終了時・3 か月後における MAC テスト（がんに対する心理的適応評価尺度）の「絶望 Helpless/Hopeless」得点の減少が有意傾向を示した。特に、乳がん患者 11 名では、放射線治療患者用 QOL-RTI の総得点と心理・精神項目得点が対照群（13 名）より有意に高く変化した。また、介入群との面談で「自己洞察の機会になった」などの反応があり、介入による精神心理的効果が示された。放射線治療部門医療関係者に対する情報共有においては、グループインタビューの分析結果から「患者対応の戸惑い」など肯定的と言えない評価が示された反面、「患者理解の促進」「患者対応の利益」がもたらされたという肯定的評価が示され、がん患者に対する情報共有を意図したアプローチが有用であることが示された。</p> <p>審査会における口頭試問では、統計的結果の解釈などの説明、用語の定義や概念枠組みの不足などについて指摘があったが、2 月 9 日に提出された修正論文において、審査委員が内容修正を確認することができた。</p> <p>本研究は、今後外来でのがん放射線療法を受ける患者が増加するなかで、看護師が、外来で、「PIL テストを手がかりとした対話」という精神心理的援助を行うための具体的方法の提示と、その有用性を示した点で独自の・新規的であり、臨床的意義が高く、審査委員 4 名全員が本審査及び最終試験合格と判断した。</p>	